

かど の 葛野の鐘

図書館報 一第 16 号一



京都光華女子大学図書館
2009.4発行
(<http://www.koka.ac.jp/toshokan/>)

(題字は元暦校本萬葉集より集字)

気軽に図書館のご利用を！

図書館長 ^{もり} 森 ^い 井 ^{まさ} 正 ^し 史



電子技術の進歩と端末機（パソコン）の普及によって情報検索が容易になったということもあり、普段はあまり大学図書館へ行かないという人が多いかも知れないが、資料収集にはやはり図書館は欠かせないものである。

本学の図書館は徳風館（正門を入れて左側の最初の建物）の1階～3階にあり、現在、蔵書は約20万冊である。備え付けのパソコンで蔵書検索をしてみたい図書があれば、もちろんすぐにでも借りることができる。他大学の図書や外部データベースの利用も簡単にでき、カウンターで申し込めば、全国の大学の図書館から必要な図書を取り寄せてもらうことも、また国立国会図書館などの資料もコピーを部分的にとって送ってもらったりすることもできる。注意しないといけないのは、特にネット上の情報を利用する場合に、典拠の不確かなものを安易にレポート作成などに使用しないことである。検索の仕方や、どのような種類の

資料を利用すればよいかというなど分からないことがあれば、遠慮せずに気軽に図書館員に尋ねて下さい。

図書館は、以上のように資料の検索や収集の場としてだけでなく、学びや思索の場、あるいは気づきの場として、個人としてだけではなく、部活やサークルなどで、また授業の一環としてグループで利用することもできる。グループ閲覧室は、2階と3階に1室ずつ設けられている。AVルームも設けられていて、ビデオ（DVD・VHS）をカウンターで借りて見ることもできる。学生諸君には、昼休みや空いている時間に図書館で気軽に新聞・雑誌などを見たり読んだりして、“メディア・ウォッチング”を楽しまれることをお勧めしたい。社会の様々な出来事や動きを知ることで、新たな世界が広がるかも。

(文学部・全学共通教育センター
フランス語フランス文学)



図書館の利用が便利になりました

◆エレベーターの利用が出来るようになりました

今までは業務用で使用していましたが利用者の皆さんにも使っていただけるよう、春休みに工事を行いました。気軽にご利用ください。また、地下書庫に入る際は今まで通り1階カウンターで手続きをしてください。

◆図書館システムのバージョンアップを行いました

OPACの画面が変更になり、Amazonから取得した資料のイメージが表示されるようになりました。また、WebcatPlusにリンクされ、資料の内容や目次情報をご覧いただけるようになりました。

◆2階閲覧室にパソコンが10台増えました。



私と図書館

書籍と私

短期大学部 こども保育学科

まつ い ゆう こ
松 井 祐 子

幼き頃より、書籍は私の良き友であった。生来病弱であったため、幼年期の鮮明な思い出といえば、薬の何ともいえない強烈な「におい」と紙とインクの香りが入り混じった形容し難い、しかし何とも懐かしい本の「におい」がある。外で遊ぶ機会が少ない病多き私の居場所は布団の中であった。

医師であった父と看護師であった母は、いつも忙しく立ち働いていたため、病床の私にとって読書が唯一の楽しみであった。外国童話の翻訳ものや日本の古典文学をやさしく子ども向きに書き直したシリーズ、あるいは古色蒼然とした祖父の遺品であるルビつき旧仮名遣いの改造社版明治文学全集などは、いつでも、どこでも拒むことなく、存分に私に付き合ってくれた。本の中の主人公になって異文化世界を涉猟し、未知なる世界や大人の世界を垣間見しつつ、新たな世界を創造していく楽しみを私は知った。

早くに両親を失った私の成長過程において自分を支えてくれたもの、それは多くの書籍との出会いである。貧乏学生のため、多くの書籍を買うゆとりはなかった。しかし、図書館に備えられた万巻の書は、研究上だけではなく自分の生き方を求める際のよき師であり友であった。

読書は著者との対話である。時代を超え国境を越えてきた多くの書は、いつでもどこでも読み手がその気になれば語らってくれる。近頃は電子媒体による情報が優位にあるとか。だが、それらは起動させる機器やエネルギーを必要とする。一方、書籍は自分が開けば、いつでもどこでも付き合ってくれ、今の自分を如実に映し出してくれる。こんな良き友を疎遠、かつ軽視する現代的風潮に私は危惧を感じずにはいられない。

(日本教育史・近代女子教育)

研究余話として

人間科学部 社会福祉学科

お が さ わ ら よ し あ き
小 笠 原 慶 彰

私の現在の研究は、林市藏という人物の生涯を追うことである。彼は、大正時代に今の民生委員に繋がる方面委員規程が大阪府で制定された時の官選知事であった。

その過程で、林市藏の父親がどういう人であったかを確認する必要性が生じた。情報としては、肥後國細川藩（現在の熊本県）藩士であったこと、明治5（1872）年に亡くなっていること、その直後に一人息子の市藏が家督を相続したらしいことがわかっている。名に関しては、藩士時代と思われる「衛門」と恐らく改名後の「愼蔵」とが伝わっている。

そこで、細川藩政史研究会（熊本大学文学部歴史学科）、新熊本市史編纂委員会（熊本市役所）、熊本市立図書館、温知館（熊本県立図書館・熊本近代文学館）

等に問い合わせしてみた。その結果、熊本県立図書館から判明したと返事があった。

それは「熊本県公文類纂」の「有禄士族基本帳」に「改正禄高等調」として遺されていた明治7年2月10日付の文書であった。これにより旧名が「林恵右衛門」であること、禄高14石の士族であったことが判明した。この文書は、家督相続の際に提出したもので、熊本県に編入される以前の白川県権令安岡良亮に宛てられていた。

一般にこうした資料は、公文書館が取り扱うが、日本ではこうした資料保存の重要性に対して認識が低い。したがって、自治体図書館が代わって役割を果たしているのだろう。それにしても、改めて「図書館畏るべし」の感を強くした。

(社会福祉史)

□□□ Topic1 □□□

☆地下2階にS-1、S-2書庫が出来ました。集密書架で約2万冊の資料が収納可能です。S-1書庫には人権関係などの資料、S-2書庫には日本文学の個人全集が配架されています。

☆「生き方探求・チャレンジ体験」で平成20年度も西

京極中学より4名が図書館に5日間来られました。図書館での中学生の受入が3度目となる今回は、初めて全員が男子生徒でした。カウンター業務では女子大学ということもあり、少し緊張されていたようですが、全ての業務を積極的に行ってくれました。

『神様 (中公文庫か-57-2)』川上弘美 (著)

(中央公論新社 2001 年)

人間科学部 人間関係学科

かわにしちひろ
川西千弘

動物が出てくる物語が大好きだ。言葉を持たない彼らが、ストーリーの中では作者の想像をかりて、実に生き生きと話し、笑い、時に涙する。

『神様』もそのような物語の1つだが、ここの“わたし”と“くま”の関係は特にユニークである。「くまにさそわれて散歩に出る」という書き出しから、てっきり“くま”は人間と思ったが、その数行後に「くまは雄の成熟した熊で、だからとても大きい」という記述に出会う。ここから、川上ワールドの始まりである。人間の“わたし”と獣の“くま”があたりまえのように散歩し、会話し、そして“わたし”はホッこりする。“くま”は獣なので“わたし”が残したミカンの皮を食べたりするが、その一方で“わたし”が昼寝をしようとすると、子守歌はいかが？！と人らしい気配りをする。作中で、“わたし”が人間であり続けるのに、“くま”は獣になったり、人間になったり、自在に変化するのだ。ラストで「親しい人と別れるときの故郷の習慣なのです。む

ろんお嫌ならいいのですが」という“くま”の申し出から、二人(?)が抱擁するが、その際“くま”が“熊の神様のお恵みがあなたの上にも降り注ぎますように”とまるで呪文のようにささやく。部屋に戻った“わたし”は、熊の神様って？と独り思案するところで物語は終了する。

散歩に行き帰る、そんなシンプル過ぎるストーリーの中に、“わたし”と“くま”が織り成す不思議な世界観がある。しかし、ここでハタと考えさせられるのは、なぜ作者が『神様』という題をつけたのか？ということだ。むろん最後に“わたし”が熊の神を空想したから。でもそれでは単純すぎる！ではこう考えられないだろうか？《神様って、案外そばに居て、さりげなく支え癒してくれる存在》なのでは？そう、この作中の“くま”のように。

こう考えると、筆者はたくさんの“くま”いや『神様』に囲まれている。ちょっと幸せになった。

(社会心理学)

2階文庫コーナー

犬養道子 (著)『お嬢さん放浪記 (犬養道子自選集 1)』

(岩波書店 1998 年)

文学部 国際英語学科

くどうやすこ
工藤泰子

本著は、著者である犬養道子氏の文筆家としてのデビュー作である。氏は、現在、執筆活動、聖書研究のほか、「犬養道子基金」を立ち上げ、難民支援活動も積極的に行っている。

初版が刊行されたのは、昭和33年で、我が国の国際観光自由化の6年前であった。当時は、一般の日本人にとって、海外旅行は夢の話である。しかも、著者が描く「放浪」は、戦後間もない昭和23年に始まる。犬養毅元首相の孫、犬養健の長女という環境に生まれ育った著者は、文字通りの「お嬢さん」だが、親にも頼らず、自力で奨学金を手に入れ、アメリカ留学を決めてしまう。誰もが2年で帰国すると信じていたが、「お嬢さん」の本当の目的地はヨーロッパであり、そこで芸術・思想を学ぶと同時に、グレイルと呼ばれる組織で徹底した共同生活を送り、「お嬢さん育ちに一本筋金を入れてもらう」つもりであった。アメリカは、渡欧費用捻出のための中継地点にすぎなかったのである。しか

し、渡米後間もなく結核にかかり、莫大な治療費が必要となった。さらに、アルバイトがアメリカの法に触れ、日本へ強制送還されそうになる。ここから先は読んでの楽しみだが、様々な困難をもの見事に解決し、結局、渡欧の夢を叶えて日本に帰国するのは、それから10年先のこととなる。

著者の発想力と行動力には驚かされることの連続で、一気に読み終えてしまう本である。80歳を超え、今なお現役で国際的に活躍していることから、10年の放浪で「一本筋金」が入ったことは言うまでもない。今日、我々日本人の多くは、国際観光あるいは留学する喜びを、著者の放浪時代に比してはるかに容易に享受できる。しかし、それだけに、夢を叶えるための積極性や目的意識は薄れていないだろうか。そんな自戒をこめながら、海外に出かける前に読んでもらいたい一冊である。

(観光学)

081.6/IMi/1 C書庫

□□□ Topic2 □□□

☆全学生、教員の利用証のICカード化により、入館ゲートにカードをタッチするだけで入館ができるようになりました。

☆Blog「図書館員のひとりごと」を始めました。図書館員によるチョット聞いてほしい日々の出来事を随時更新しています。

図書館と私

大学院 文学研究科 日本語日本文学専攻 平成20年度修了

さいとうみさ
齋藤美紗

大学院入学に伴い始まった「文化史演習」という授業では、史料講読（古記録・古文書を読む）と論文講読（研究テーマを中心に関連する先行研究の講読）の指導を受けています。授業に臨む際、これらの史料や先行研究を収集することは不可欠で、図書館内書庫の利用が頻繁になりました。そこで、私が専門としている歴史学の研究視点から、「図書館と私」について二三お伝えしたいと思います。

私の研究テーマは、平安・鎌倉時代の祇園御霊会（現在の祇園祭）です。現行の山鉾町主体の祇園祭とは異なり、平安時代に行われていた祇園御霊会は、その名称もさることながら朝廷主導で行われるなど、現在と様相が大きく異なります。先行研究においても、その執行状態は未だ明らかではありません。そこで、この時代の祭りの執行状態を明らかにし、祭りと王権との関わりについて考える研究を行いました。

研究方法としては、平安から鎌倉時代に記された祇園御霊会に関する記録を収集、蓄積された史料の中か

ら祭りの形式を確定していくわけですが、当該期に記された日記類は数多く、また、それらは活字化されているので、簡単に手に取る事が出来ます。そこで、日記類を総めぐりし、祇園御霊会の記述箇所を収集するのですが、膨大な史料の山から祇園御霊会に関する記述を捜すのは困難なこともあり、『史料総覧』や『大日本史料』、或いは東京大学史料編纂所の検索データベースを使って確認、抜けが無いよう収集を続けました。該当箇所複写の後、自作のカードに貼り付け、これを御霊会分析の基礎データとし、演習ではこのカードを利用して分析を行いました。

準備には、手間と根気が必要です。図書館では、史料収集と論文検索という目的に追われ、大量の本・雑誌の貸出と複写の繰り返しだったように思います。図書館で有意義に時を過ごすということも暫く御無沙汰していましたので、修士論文が完成した暁には、一度館内でゆっくり閲覧利用をしたいと考えています。

□□□ 寄贈図書一覧 □□□

(平成20年1月～12月受入) 寄贈者の50音順 (敬称略)

〈現旧教職員〉

飯 沼 万里子

伊勢丹な人々 他

糸 井 道 浩

王朝物語のしぐさとことば 他

太 田 清 史

証言の昭和史 他

大 原 佳 世

本当のあなたに出会える

カラーコーディネート術

小笠原 慶 彰

新熊本市史 他

岡 本 和 子

シリーズ総合人間学 他

加 納 恵 子

問題少女 他

可 藤 豊 文

女子大生

-自己のアイデンティティーを求めて- 他

加 藤 実

もうひとつのみやび

木版本源氏物語絵巻 他

河 原 俊 昭

外国人と一緒に生きる社会がやってきた!

他

木 邊 円 慈

ロンドン図書館物語 他

佐々木 勝 一

障害者施設研究序説

関 肇

新聞小説の時代

高 木 英 明

自尊心の構造 他

高 野 弘 幸

希望の国へ

八本木 浄

ネアンデルタール人の正体 他

平 川 泰 司

Harry Potter and the Deathly hallows

広小路 亨

東本願寺近代史料 他

古 川 弘 之

古英詩拾遺 他

松 井 祐 子

教育の原理 第2版

三 村 晃 功

保田興重郎文庫 他

吉 村 裕 美

日本語形容詞の記述的研究 他

渡 邊 愛 子

観音の扉

〈在校生・学園関係者 他〉

片 柳 つかさ

古典入門1 古事記 他

黒 田 智 子

現代日本のガラス 1

沙加戸 弘

真宗関係浄瑠璃展開史序説 素材の時代

鳥 居 晶 子

飛ぶ教室 児童文学の冒険 3

山 崎 泰 正

京・嵯峨嵐山の伝説を歩く

※この他に、学外の方からも多数の図書をご寄贈いただきました。改めて御礼申し上げます。

編集後記

今回より15年続いた「葛野の鐘」のデザインを変えることとなり、少し明るいイメージになったのではないかと思います。今後も、皆さんに手にとっていただける館報をお届けしたいと思っています。

また、ご寄稿くださいました皆様には心より御礼申し上げます。